

令和六年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ 「〇〇字で」、または「〇〇字以内で」、という指示がある場合は、「。」「、」「かっこ」なども一字と数えます。

— 次の記事を読んで後の問いに答えなさい。本文の上にある数字は行数を表します。

【舞台は二千数百年前の中国。思想家の孔子は、「仁」（思いやり、人間としての心のあたかみ）と「義」（人として行うべき正しい道）に基づき平和な社会を理想として掲げ、各地を演説して回った。晩年は教育に注力し、弟子は三千人にも達した。以下の場面は、孔子とその弟子の一人である冉求とのやりとりを描いたものである。】

「冉求はこのごろどうしたのじゃ。さっぱり元気がないようじゃが。」

孔子にそう云われるほど、実際冉求はこの一二月弱りきった顔をしている。別に身体に故障があるのではない。ただひどく気分が引き立たないのである。

彼が孔子の門にはいったのは、表面はとにかく、内心では、いい※仕官の口を得たいためであった。仕官をするには、一とおり詩書礼樂に通じていなければならない。そして、その方面にかけての第一人者は、何と云っても孔子である。孔子の門にさえはいって居れば、ともかく一人前の人間に仕立ててもらえるだろうし、それは仕官の手筈だって、きっと得やすいにちがいない。そう思って、彼はせっせと勉強しつづけていたのである。

ところが、しばらく教えをうけているうちに、彼は一つの疑問にぶつかった。それは孔子の学問が、最初自分の考えていたのとちがって、何だか実用に適しないように思えることであつた。なるほど孔子は、いつも理論よりも実行を尊ばれる。それはよくわかる。よくわかるが、その実行というのが、非常に世間放れのしたもので、忠実にそれを守っていたら、実生活の敗北者になりそうなことばかりである。客観性を持たない真理は、要するに空想に過ぎないのではないか。自分は美しい空想を求めて入門したのではない。もっと生活に即した、実現性のある教えがほしい。

それに、こんな夢のようなことばかり教わって、ぐずぐずしていたのでは、仕官の機会がいつ来るのか、わかったものではない。そう云えば、孔子は、われわれ門人のために、仕官について、ちっとも積極的に働いてくれないというのだ。「自分にそれだけの力さえあれば、何も世間にも名の知れないのを心配することはない。」などとよく云われるが、今の時代にずいぶん迂遠な話だ。むやみと押売りするわけにも行くまいが、ちつとはわれわれの気持を察して、何とかわれわれの評判が立つようにして貰いたいものだ。

とにかく今のままでは面白くない。顔回など、馬鹿正直に孔子の一言一行を学んで、喜んでいようだが、あんなに身体が弱くて、どうせ忙

20 しい政治家などになれない人は、あんな風にでもして、自ら慰めるより仕方があるまい。だが、われわれと顔回とを同一視して、彼の真似さえしていれば、それでいいような風に云われるのは、少々心得がたい。なるほど顔回は、あんな風だから、個人的な徳行の点では、優れているのかも知れない。しかし、政治には、子路のような蛮勇も要れば、子貢のような華やかさも要る。そう誰も彼も同じ調子で行くものではない。個性を無視して、何の教育だ、何の道だ。

25 彼は、そんな不平を抱いて、永いこと過して来た。そして、幾度となく、いろんな理窟をこねまわして、孔子にぶっつかって見た。しかし、ぶっつかって見ると、いつも造作なく孔子にやりこめられてしまった。やりこめられたというよりは、軽々と抱き上げられて、ぽんとやさしく頭をうたれたような気がするのだった。そのたびごとに彼は拍子ぬけがした。そして、そのあとには変にさびしい気持が、彼の心を支配するのだった。

30 日がたつにつれて、彼は、孔子があまりによく門人たちの心を知っているのに驚いた。彼自身、どれほどうまく言葉を繕って見ても、孔子はいつも先廻りして、彼の前に立ちふさがっていた。個性を無視するところではない、一人々々の病気をよく知りぬいていて、まるで魔術のように急所を押さえてしまう。しかもその急所の押さえかたは決してその場の思いつきではない。孔子の心のどこかに、一つの精妙な機械が据えつけてあって、そこから時と場合とに応じて、自由自在にいろんな手が飛び出して来るように思える。「道はただ一つだ。」とは、よく聞かされた言葉だが、恐らくそれが孔子の擱んである道なのだろう。しかし、その正体はわからない。それは「仁」だというものもある。「忠恕」だというものもある。言葉では何とでも云えるだろうが、その心持を実感的に味うことは容易でない。しかも、それこそ孔子が、生きた日々の事象を取りさばいて行く力なのだ。決してそれは、自分が以前に考えていたような美しい空想ではない。十分な客観性をもった、血の出るような実生活上の真理なのだ。そして、それを掴むこそ、真の学問なのだ。

35 彼はだんだんとそんなことに気がつき出した。同時に彼の態度も次第に変って来て、仕官などはもうどうでもいいことのように思われ出した。そして、そういう心で門人たちを見ると、なるほど顔回はその中でも一頭地をぬいている。閔子騫や、冉伯牛や、仲弓もなかなか立派である。宰我や子貢は何だかナマイキに見える。子夏と子游とは少しうすっぱらだ。子路は穴だらけの野心家のように思える。そして自分は、と彼は自ら省みて、いつも一種の膚寒さを感じるのであつた。

子路に似て政治を好みながら、子路ほどの剛健さと醇朴さを持たない彼は、とかく小策を弄したり、言いわけをしたりすることが多かった。門人仲間では謙遜家のように評されているが、それは負け惜しみや、ずるさから出る、表面だけの謙遜であることを、彼自身よく知っていた。彼は

自分の腹の底に、卑怯な、小ざかしい鼯のような動物が巢喰つていて、いつも自分を裏切つて、孔子の心に背かしているような気がしてならなかった。

(俺は道を求めている。この事に間違いはないはずだ。)

彼はたしかにそう信じている。しかし同時に、彼の心のどこかで彼が道を逃がっていることも、間違いのない事実であった。そして、(駄目だ。俺は孔子の道とは、もともと縁のない人間だったのだ。)

彼は、このごろ、しみじみとそう思うようになった。そして、いくたびか孔子の門に別れを告げようかと考えたこともあった。しかし、思いきつてそれも出来なかった。こうして、ぐずぐずしている間に、彼の腹の中の鼯はいよいよ彼に、表面をかざるための小策を弄さした。そして、小策を弄したあとの淋しさは、そのたびごとに、いよいよ深くなつて行くばかりであった。

こうして彼の顔色は、孔子の眼にもつくほどに、血の気を失つて来たのである。

彼は、とうとうある日、ただ一人で孔子に面会を求めた。心の中を何もかもさらけ出して、孔子の教えを乞うつもりだったのである。ところが、孔子の室にはいると、例の腹の中の鼯が、つい、ものを云つてしまった。

「私は、先生のお教になることに強いあこがれを持っています。ただ、私の力の足りないのが残念でなりません。」

彼は云つてしまつて、自分ながら自分の言葉にちつともツウセツなところが無いのに驚いた。

(何のために自分はわざわざ一人で先生に面会を求めたのだ。こんな平凡な事を云うくらいなら、いつだってよかったはずだ。先生も定のおかしな奴だと思われるだろう。)

そう思つて、恐る恐る彼は孔子の顔を見た。

孔子は、しかし、思つたよりも遥かに緊張した顔をしていた。そして、しばらく再求をじつと見つめていたが、

「苦しいかね。」

と、いかにも同情するような声で云つた。

(5) 再求の鼯は、その声をきくと急に頭をひっこめた。そしてその代りに、しみじみとした感じが、彼の胸一ぱいに流れた。彼は、母の胸に顔をくっつけているような氣になつて、思う存分甘えて見たいとすら思つた。

「ええ、苦しいんです。なぜ私は素直な心になり得ないのでしょうか。いつまでもこんな風では、先生のお教えをうけても、結局駄目ではないかと

存じます。」

「お前の心持はよくわかる。しかし、苦しむのは、苦しまないのよりは却^{かえ}っていい事なのじゃ。お前は、自分で苦しむようになったことを、一つの進歩だと思つて、感謝していい、何も絶望することはない。」

「でも先生、私には、真実の道を擲^{つか}むだけの素質がないのです。本来駄目^{だめ}に出来ている男なのです。私は卑怯^{ひきょう}者^{もの}です。偽^{いつわ}り者^{もの}です。そして……」

と、冉求は急にある束縛^{そくばく}から解放されたように、やたらに、自分をけなしはじめた。

(6) 「お黙^{だま}りなさい。」
と、その時凜然^{りんぜん}とした孔子の声^{こゑ}が響^{ひび}いた。

「お前は、自分で自分の欠点を並べたてて、自分の気休めにするつもりなのか。そんな事をする隙^{ひま}があつたら、なぜもつと苦しんで見ないのじゃ。お前は、本来自分にその力がないということ、弁解^{いひわけ}がましく云つてゐるが、ほんとうに力があるか無いかは努力して見た上でなければわかるものではない。力のない者は中途^{ちゆうと}で斃^{たふ}れる。斃^{たふ}れてはじめて力の足りなかつたことが証明されるのじゃ。斃^{たふ}れもしないうちから、自分の力の足りないことを予定するのは、天に対する冒瀆^{ぼうとく}じゃ。何が悪だといつても、まだ試しても見ない自分の力を否定するほどの悪はない。それは生命そのものの否定を意味するからじゃ。しかし……」

と、孔子は少し声をおとして、

「お前は、まだ心からお前自身の力を否定してゐるのではない。お前はそんなことを云つて、わしに弁解^{べんげ}をすると共に、お前自身に弁解^{べんげ}をしてゐるのじゃ。それがいけない。それがお前の一番の欠点じゃ。」

冉求は、自分では引つこめたつもりでいた魑^ちの頭^{かぶ}が孔子の眼^めには、ちつとも隠^{かく}されていなかったことに気がついて、少^{すく}からず狼狽^{ろうたい}した。
孔子は、しかし、静かに言葉をつづけた。

「それというのも、お前の求道心^{きうだうしん}が、まだ本当には燃え上^{あが}つてゐないからじゃ。本当に求道心^{きうだうしん}が燃えて居^おれば、自他^{※おもね}に阿^ある心を焼^やきつくして、素朴^{そぼく}な心にかえることが出来る。素朴^{そぼく}な心こそは、仁に近づく最善の道なのだ。元来、仁というものは、そんなに遠方にあるものではない。遠方にあると思うのは、心に無用の飾^{かざ}りをつけて、それに隔^{へだ}てられてゐるからじゃ。つまり、求める心が、まだ真剣^{しんけん}でないから、というより仕方がない。どうじゃ、そうは思わないのか。」

冉求は、うやうやしく頭を下げた。

「とにかく、自分で自分の力を限るようなことを云うのは、自分の恥^はになっても、弁護^はにはならない。それ、よくそこいらの若い者たちが歌っている歌に、

85

ゆすらうめの木
花咲きやまねく
ひらりひらりと
色よくまねく。

90

まねきやこの胸
こがれるばかり、
道が遠くて
行かりやせぬ。

95

というのがある。あれなども、人間の生命力を信する者にとつては全く物足りない歌じゃ。なあに、道が遠いことなんかあるものか。道が遠いといつてへこむのは、まだ思いようが足りないからじゃ。はっ、はっ、はっ。」

孔子は、いかにも愉快^{ゆかい}そうに、大きく笑った。
冉求^{ぜんきゅう}は、このごろにない^④ホガらかな顔をして室を出たが、^⑦その足どりに新しい力がこもっていた。

(下村湖人『論語物語』より)

※仕官……官職に就^つき、役人になること。

※詩書礼楽……孔子が重要視した学問。

※顔回……孔子の弟子の名。以下「子路」「子貢」「閔子騫」「冉伯牛」「仲弓」「宰我」「子夏」「子游」も、すべて弟子の名。
※道……孔子が重要視した道徳。

※忠恕……自分の良心に忠実であることと、他人に対する思いやりが深いこと。

※醇朴さ……素直さ。飾り気のないうさま。

※狼狽……あわて、うろたえる。

※阿る……人の気に入るように振る舞う。へつらう。

問一——線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線①「とにかく今のままでは面白くない」とありますが、冉求の抱いている感情としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 孔子の教えは絵空事にすぎず、それを頑なに信じていたら実生活の敗北者になってしまうのではないかという心配。

イ 孔子の教えを忠実に守っていても、自分の求めるような良い仕官の口は見つからないのではないかという不安。

ウ 孔子は悠長なことを口にするばかりで、弟子たちの心情やその将来については考えていないのではないかという疑念。

エ 孔子の教えをありがたがって実践に移している顔回に比べて、自分は仕官が遅れてしまうのではないかという焦り。

オ 孔子は弟子それぞれの個性を考慮に入れることをしないで、よい師であるとは言えないのではないかという不信感。

問三——線(2)「さびしい気持」とありますが、これと波線部「淋しき」(46行目)とはどのように異なりますか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「さびしい気持」は、真剣に訴えても孔子に子ども扱ひされてしまうように感じ、物足りなく思う冉求の気持ちである。これに対して、「淋しき」は、自分の訴えは理屈をもてあそぶだけの空虚なものにすぎないと理解したからこそ抱く、無力感や孤独感である。

イ 「さびしい気持」は、懸命に訴えても孔子に誠実に向き合ってもらえないように感じ、もどかしく思う冉求の気持ちである。これに対して、「淋しき」は、孔子が自分のことを考えてくれない原因は自分にあることを理解したからこそ抱く、罪悪感や孤独感である。

ウ 「さびしい気持」は、全力で訴えても孔子に相手にされないと感じ、落胆する冉求の気持ちである。これに対して、「淋しき」は、自分が道をあきらめたのは他の弟子たちのような美德を持ち合わせていないためだと理解したからこそ抱く、無力感や劣等感である。

エ 「さびしい気持」は、努めて論理的に訴えているのに孔子に頭ごなしに否定されてしまうように感じ、いらだつ冉求の気持ちである。これに対して、「淋しき」は、自分の理屈は主張するほどの価値がないことを理解したからこそ抱く、虚無感や罪悪感である。

オ 「さびしい気持」は、理路整然と訴えようとすればするほど孔子に小馬鹿にされるように感じ、むなしく思う冉求の気持ちである。これに対して、「淋しき」は、自分は努力しているのに孔子に認めてもらえていないと理解したからこそ抱く、虚無感や劣等感である。

問四——線(3)「仕官などはもうどうでもいいことのように思われ出した」とありますが、ここでの冉求の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弟子たちの長所や短所をふまえて教育をおこなう孔子の態度に接することが重なり、それまで自分があこがれていた役人たちにはない美点を孔子に見出し、自分の一生を捧げる場所は実社会ではなく学問世界の内にありたいと思いはじめた。

イ 弟子たちの能力や性格に合った方法を模索しながら変幻自在に指導する孔子の態度に接することが重なり、それまで主観的にすぎないと思っていた詩書礼楽のなかに客観性を発見し、自分なりの真理を追究しようと考えようになっている。

ウ 弟子たちの心理や健康状態によく配慮してその場に応じた助言を与えてみせる孔子の態度に接することが重なり、それまで自分が軽んじていた孔子の教えの重要性に気づき、自分も孔子の味わっている徳の道を実践したくなっている。

エ 弟子たちの出自や考え方を尊重した言葉選びで教えを授けようとする孔子の態度に接することが重なり、それまで無個性だと思っていた

孔子を高く再評価し、自分も真の学問である詩書礼楽に励んで道を究めるべきだと態度を改めている。

オ 弟子たちの個性や欠点に応じた説教を臨機応変かつ効果的に行う孔子の態度に接することが重なり、それまで自分が抱いていた孔子に対するイメージが覆されて自分の考えの浅さを恥じ、自分が求めるべきものは何かを認識し直している。

問五

——線(4)「一種の膚寒さを感じる」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 孔子の説く道を実践できているかどうかで他の弟子たちを評価するその振る舞い自体が、孔子の説く道から最も遠い悪行であるように感じられ、愕然とするということ。

イ 孔子の説く道を実践できているかどうかで他の弟子たちを評価したうえで自分はどうかと考える際、他者からの良い評価を全く受けていなかった事実に至り、ぞつとするということ。

ウ 孔子の説く道を実践できているかどうかで他の弟子たちを評価するその視点で自分自身を眺めると、自分の行いは孔子の説く道から程遠いように感じられ、恐れおののくということ。

エ 孔子の説く道を実践できているかどうかで他の弟子たちを評価しようとするが、その判断基準が正当であるかどうかを確かめる術がないことに思い至り、動揺するということ。

オ 孔子の説く道を実践できているかどうかで他の弟子たちを評価するたびに、自分自身も当初は孔子の説く道を疑ってかかっていたという過去に思い至り、背筋が凍る思いをするということ。

問六

——線(5)「冉求の颺は、その声をきくと急に頭をひっこめた」とありますが、それはどういうことですか。六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問七 — 線(6)「『お黙りなさい。』」とありますが、この発言の意図はどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記

号で答えなさい。

ア 孔子に取り入ろうとする冉求にあえて他人行儀な姿勢で拒絶することで、彼の非礼に気づかせようとしている。

イ 不要なまでに自分をけなし続ける冉求をたしなめ、彼自身が気づけていない美点を認めさせようとしている。

ウ 自己否定を続ける冉求を制止し、その言動こそが自己弁護にすぎない姑息なものであると指摘しようとしている。

エ 孔子のことを親のように慕って甘えた言葉を並べ立てる冉求を叱りつけ、自立心を持たせようとしている。

オ 理屈をこねて他の弟子たちを見下す冉求に話をやめさせ、道を求めるにあたつて取るべき態度を示そうとしている。

問八 — 線(7)「その足どりには新しい力がこもっていた」とありますが、ここでの冉求の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア 孔子に悩みを告白して胸のつかえが下り、今後は自分の卑怯な性格を認めて開き直ることで気休めとするのではなく、考えたが悩んだりする暇もないほど忙しく立ち回ろうと新たに決心している。

イ 孔子を肉親にも似た存在として信頼し直すことができ、今後は自分の本心を誰も分かってくれないと嘆くのではなく、悩んだときには遠慮せず周りに助けを求めていこうとかつての考えを改めている。

ウ 孔子のもとで学ぶことに間違いはなかったと確信し、今後は自分の欠点に気づかないふりをするのではなく、他の誰にも劣らない弟子になることを求めて真剣に学問を続けていこうと新たな誓いを立てている。

エ 孔子から授けられた助言を胸に刻むことができ、今後は小ざかしい理屈をつけて自分を偽るのではなく、いつも師の言葉を思ひ出すことで仁にかなう振る舞いを実践し他者を優先していこうと改めて決意を固めている。

オ 孔子との対話を経て背中を押してもらったように感じ、今後は自分の素質をごまかしたり過小評価したりしてできない理由を探るのではなく、自分の可能性を信じてもつと真剣に苦しみ抜こうと覚悟を新たにしている。

問九

次のア～オは、この作品を読んだ生徒たちの感想です。本文の解釈として明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 孔子^{こうし}って偉^{えい}そうに格言^{ごごげん}めかしたことをひたすら言う厳格^{げんかく}なおじいさん、というイメージがあつたけれど、「『冉求^{ぜんきゅう}はこのごろどうしたのじゃ。さっぱり元気がないようじゃが。』」（1行目）からは、きちんと弟子のことを気に掛^かけている優しさを感じたよ。いい先生だ。
- イ 温かさをベースとしながらも、「孔子の心のどこかに、一つの精妙^{せいみょう}な機械^{きがい}が据^すえつけてあつて」（27行目）とあることから、正確であることをよしとするこだわりのようなものや、ある種の非情な側面もあつたのだろうと推測されるよ。教育者としては必要な態度だね。
- ウ 弟子たちにとっては雲の上のような存在^{そんざい}だけど、「孔子は、しかし、思つたよりも遥^{はる}かに緊張^{きんちやう}した顔をしていた」（55行目）からは、弟子の悩^{なや}みをきちんと受け止めて、同じくらいの真剣^{しんけん}さをもつて向き合おうとする態度^{たいど}がうかがえるね。こういうひとに相談^{さうだん}したいな。
- エ 「凜然^{りんぜん}とした孔子の声」（67行目）や「孔子は少し声をおとして」（73行目）からは、説教の内容が優れているだけでなく、語り方にも変化をつけて、弟子たちの心に響^{ひび}くような工夫^{くふう}ができているとも言えるよね。孔子自身が意図してやっているかは分からないけどさ。
- オ 「孔子は、いかにも愉快^{ゆがい}そうに、大きく笑つた」（96行目）からは、最後には明るく送り出してやっている感じがした。流行の歌を取り入れたりもしていて、終始深刻なトーンで説教されるより、気が滅入^{めいじゅう}らなくていいよね。こういう大人の姿にあこがれるなあ。

二
次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

コンビニのトイレなどにある「当店のトイレをきれいに利用いただきありがとうございます」といった張り紙が気になっている。「利用するのはこれからののに、先手を打って『ありがとう』とは……？」と首をひねったことのあるひとも多いのではないだろうか。それは、私が気になっている点のひとつでもある。もう少し①センモンの言うと、「このとき感謝という言語行為は成り立っているのか？」と考えてしまうのだ。もうひとつ気になるのは、こうした張り紙を見ると、どうにもきれいに利用しないと感ぜられるところだ。もちろん、コンビニのトイレはいつだってきれいに利用しないとならないのだが、それとは別に、命令されたわけでもないのに、何かしらの強制力を感じさせられる。いったいなぜなのだろうか。

さて、先ほど挙げた「言語行為」というアイデアに戻ろう。以前にも手短かに説明したが、一九世紀末から一九二〇年代ごろにかけてゴットロープ・フレーゲ (Gottlob Frege)、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell)、ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) といった哲学者が作り上げてきた言語観においては、言葉は世界を写し取る像のように考えられていた。この言語観では、さまざまな文が世界を正しく写し取っているか否か、あるいはそもそも世界を写し取るのに適した本物の文になっているか否かに焦点が当てられることになる。第二次大戦後のオクスフォードで活躍した哲学者ジョン・L・オースティンは、そうした言語観を※「狭隘なものだ」と見なし、世界を写し取る、つまり描写するというのは言語を使っておこなえる行為の一種にすぎず、それ以外にも私たちは賭け事をする、推測をする、主張をする、不平を言うなどたくさん行為を言語によっておこなっていると論じた。言語を用いておこなう行為は「言語行為」と呼ばれ、②ジユウライの言語哲学では見過されてきたさまざまな現象が、言語行為という観点から反省されるようになった。

一般に、言語行為にはそれをおこなうために充足しなければならない条件があるとされる。オースティンはそれを「適切性条件」と呼んでいたが、オースティンを引き継いで言語行為論を発展させたジョン・R・サール (John R. Searle) はさらに分析を進め、著作『言語行為』（坂本百大・土屋俊訳、勁草書房、一九八六年）でそれをいくつかの規則へと切り分けた。例えば私が担当の編集さんに①「締め切りを延ばしてください」と依頼するためには、編集さんに締め切りを延ばす権限があり、そうした権限があると私もわかっており、頼まなければ編集さんが締め切りを勝手に延ばしたりはしなそうで、しかも

のでなければならない。締め切りに関して編集さんには決定権がない場合にそ

れと知りながら「締め切りを延ばしてください」と言うのは依頼というより無茶振りだろうし、すでに締め切りを延ばすように調整中であると知らされていながら「締め切りを延ばしてください」と言えば依頼というより何らかの嫌味であり、また本心では締め切りを延ばしてほしくないにもかかわらず「締め切りを延ばしてください」と頼んで反応を窺うなどしていたら、本当に依頼をしているというより何らかの不誠実を働いていることになるだろう。本当の依頼はそのようなものであってはならないはずだ。サールは、大まかに言うところとした議論をしている。

『言語行為』には、言語行為の一種として「感謝」も挙げられている。感謝は聞き手によっておこなわれた過去の行為が話し手に益するものであり、しかも話し手も自分が恩恵を受けたと思っていて、そのことを好意的に評価している場合にのみ適切になされうるものだと思われる。要するに、相手が何か自分にとってよいことをしてくれて、それを好意的に評価している場合に「ありがとう」と言って感謝をするという話で、私たちの日常的な感覚そのままと言えばそのままだ。

ここで気になるのが、トイレの「きれいに利用いただきありがとうございます」である。言語行為論に照らすなら、感謝はすでになされた行為に関するものでなければならないのだが、この掲示を見ると、たいいていの場合そのひとは感謝されるべき当の行為をまだおこなってはいないはずだ。だとすると、締め切りを延ばせないとわかっていて締め切りを延ばしてくれと依頼する場合のように、この感謝は不適切なものとなるはずだ。この場合の「不適切」はマナーの問題などではなく、もう少し強い意味で、「そのような言語行為はコミュニケーションのありかたに反する」といったことになる。しかし、それならそうした張り紙がこれだけあちこちに見られるのは奇妙にも思える。

調整という概念がこの現象を理解する鍵になるかもしれない。「うちの猫が最近やけに甘えてきて……」という発言は、発言者の家に猫がいるという前提が満たされて初めてまともな発言となり、発言者の家に猫がいなかった場合には③「ヨウリヨウを得ないものとなる。だが、発言者の家に猫がいなくて知らない相手に「うちの猫が最近やけに甘えてきて……」と言ったとしても、たいいていの場合、相手は「待つて、あなたの家に猫はいないの？ いらないの？ まずそこをはっきりさせて」などとは言わず、単に「そっか、猫がいるんだ」とすんなり受け入れるだろう。発言が適切になるための条件が満たされているかどうか確認が取れていないにもかかわらず、その場で「こういうふう言う以上、条件は満たされているのだろう」と見なし、発言の適切さを疑わないで済みます、というところが日常的にはよくおこなわれる。哲学者デイヴィッド・ルイス(David Lewis)はこれを「調整」と呼んだ。一九七九年に『Journal of Philosophical Logic』誌の第八巻一号で発表された論文「言語ゲームにおけるスコア記録」(「Scorekeeping in a Language Game」)の1つだ。

言語行為に関しても、調整が働くと考ええることができるのではないだろうか。つまり、常にはないが少なくとも一部の場面においては、

条件を満たさない言語行為があけつづろげになされたとき、その言語行為は不適切なものとして終わるのではなく、むしろその言語行為を適切なものとすべく条件を事後的に満たすことが目指される、というように。このメカニズムによって、トイレで実際の利用に先立って「きれいに利用いただきありがとうございます」と言われると、このままでは不適切となるその感謝を適切なものにすべく、利用者は感謝に値する利用法を目指すよう促される、ということなのではないだろうか。はつきりと命令や依頼の言葉を語るのではなく、表面上は感謝という好意的に受け入れやすい振る舞いをしつつ、⁽³⁾調整のメカニズムを通じて相手の行為を方向づけているとすれば、こうした言語行為は思いのほか複雑な駆け引きのもとでなされているのかもしれない。

言語行為の調整は、それと意識しているにせよ、していないにせよ、実は様々な場面で機能していると考えられる。そしてそれは、ときに有害な仕方でも、相手をコントロールするものともなっているのかもしれない。例えばここ数年、「マンスプレイニング」という言葉をよく聞くが、これもその一例となるだろう。

マンスプレイニングの典型例としてよく語られるのは、例えば女性が美術館で絵を眺めているときに、突然見知らぬ男性が現れ、女性が絵画に詳しくないという前提で解説を始めるといった状況である。また、※レベッカ・ソルニット (Rebecca Solnit) の『説教したがる男たち』(ハーン小路恭子訳、左右社、二〇一八年) には、著者のソルニットが自分自身の書いた本を、ある男性から読んで勉強すべきものとして勧められた経験が語られている。

マンスプレイニングを言語行為として分析する試みは、すでに二〇二〇年にケイシー・レベッカ・ジョンソン (Casey Rebecca Johnson) という哲学者が *Feminist Philosophy Quarterly* 誌の第6巻4号にて、「マンスプレイニングと発語内的力」(“Mansplaining and Illocutionary Force”) と題する論文で展開している。そこでは、女性が何かを主張しても、しばしばその発言は主張ではなく、一種の質問であると見なされ、マンスプレイニングはこの誤認のもとで女性の発言への反応として生じるのだ、と分析されている。そのうえで、女性の言語行為を誤認させる社会的条件がこの問題を引き起こしている⁽⁴⁾と論じられる。ただこの分析は、ソルニットの例には適切でも、美術館の例をうまく扱えない。というのも、美術館の例では誤認されるかどうか以前に、女性のほうはそもそも取り立てて発言をしていないものと想定されるからだ。

言語行為の調整という観点を加えると、マンスプレイニングは必ずしも先立つ質問(だと誤認したもの)へのリアクションとしてなされるわけではない、と考えられるようになる。まずそれがなされ、そのあとで調整によってその言語行為を適切にする条件が整えられるようになっていく、ということもありうるのだ。

マンスプレイニングは説明の一種で、そして説明は相手が質問をした、あるいはするのが適当である場面でなされる、と考えてよいだろう。質問は、『言語行為』によると、話し手が答えを知らない場面でも適切になされない。それを踏まえたうえで、美術館で見られるようなマンスプレイニングがなされたとき、調整アコモーションによって、そのリアクションのもととなる質問がなされるに相応しい状況ふさわが、いままさに成り立っていると事後的に見なされるようになるのだとしてみよう。これはつまり、マンスプレイニングをされた側が質問をするための条件を満たしている、つまり無知であるという想定が、その場で採用されるようになる、ということだ。

(5) 言語行為の調整アコモーションという観点を取るとき、マンスプレイニングの害もよりわかりやすくなるだろう。それは単に不愉快ふゆかいなのではない。それは、それが向けられる人物が無知な存在であると想定するよう会話参加者たちに促す行為なのだ。しかもそれは、その人物が実際に無知であるかどうかとは関係なく効力を発揮する。聞き手が無知だからマンスプレイニングがなされるのではない。マンスプレイニングがなされることで、聞き手が「無知な者」の位置に押し込められるのである。そして「女性は無知だ」という※ステレオタイプがマンスプレイニングを誘発ゆうはつしたとしたら、そのマンスプレイニングがいわば自作自演式に女性である聞き手を無知な存在という枠わに事後的に当てはめることになり、出発点にあったステレオタイプをその会話に組み込んでしまうことになる。これは心理的に不愉快であるというのを超えた、具体的な害だと言ってよいだろう。トイレの話からずいぶん遠くまで来た。言語行為論にはどうにもそういうところがあり、何気なく目に留まった言葉から、つい思いがけない旅に出てしまう。トイレで見かけた言葉から旅に出るなんて、安倍公房の『方舟はつうさくら丸』のようだなど、なんだか楽しくなる。ひととおしやべり、電車の④マドから見える看板、料理本のレシピ……、言葉はいつだって新しい旅への呼びかけだ。

(三木那由他『言葉の展望台』より)

※狭隘……せまいこと。

※マンスプレイニング……「man (男性)」と「explaining (説明・解説する)」をかけあわせた用語で、主に男性が相手を見下して何かを解説したり、知識をひけらかしたりすることを指す。

※レベッカ・ソルニット……女性作家。環境、土地、芸術など多分野に著作がある。

※経験……ソルニットがホームパーティーに招かれた際にその家の男性主人からどのような作品を書いているか問われたため、最新の著作のテーマについて話し始めると、主人に話を遮られてそのテーマの重要な文献ぶんけんとしてソルニット自身の著作を紹介されたことを指す。

※ステレオタイプ……多くの人に広まっている先入観や思い込み。

問一

——線①～④のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずつにいねいに書くこと。

問二

——線①「『締め切りを延ばしてください』と依頼する」とありますが、この部分について、Aさんは次のようなメモを書いて整理しました。メモの 1 に入る表現として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。なお、本文の 1 とメモの

1 とは対応しています。

メモ

・言語行為

|| 編集者に「締め切りを延ばしてください」という依頼をする

・言語行為を行うために満たさなければいけない条件

|| ① 編集者は締め切りを延ばす権限がある

② 編集者が締め切りを延ばす権限があることを「私」はわかっている

③ 依頼しなければ編集者が締め切りを延ばすことはない

④ 1

ア 「私」は編集者が締め切りを延ばしたくないということを知っている

イ 「私」は編集者に締め切りを伸ばしてほしいと思っていることを悟^{さと}られたくないと考えている

- ウ 「私」は編集者に締め切りを延ばすように計らってほしいと思っている
- エ 編集者は締め切りを延ばさなかったとしても「私」が書き終わると確信している
- オ 編集者は締め切りを延ばしたとしたら「私」が書かなくなると予想している

問三 — 線②「奇妙にも思える」とありますが、筆者がどのように考えるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 感謝は他者によってすでになされた行いを自分が賞賛する場合にとる言語行為であり、トイレの例では、相手に威圧感を与えていながら丁寧な言葉遣いで感謝の言葉を述べるという点においてコミュニケーションとしては矛盾したものであるにもかかわらず、このような張り紙が多くの場合で見られるから。

イ 感謝は他者によってすでになされた行いを自分が敬意を持って受け入れた場合にとる言語行為であり、トイレの例では、使う前から利用者に対して張り紙で一方的に感謝の言葉を述べるという点においてコミュニケーションとしては礼儀を欠いたものであるにもかかわらず、このような張り紙が多くの場合で見られるから。

ウ 感謝は他者によってすでになされた行いを自分が高く評価してそれを相手に伝える場合にとる言語行為であり、トイレの例では、感謝を伝えたあとの相手の反応が見えないのに張り紙で感謝の言葉を伝えるという点においてコミュニケーションとしては身勝手なものであるにもかかわらず、このような張り紙が多くの場合で見られるから。

エ 感謝は他者によってすでになされた行いを自分が好ましく捉えた場合にとる言語行為であり、トイレの例では、利用者はまだ感謝に値するような行いをしていないのに張り紙で感謝の言葉を伝えるという点においてコミュニケーションとしては成立していないにもかかわらず、このような張り紙が多くの場合で見られるから。

オ 感謝は他者によってすでになされた行いを自分が好意的に解釈した場合にとる言語行為であり、トイレの例では、利用者の実際の行動には関心を払わず表面的な感謝の言葉を並べるという点においてコミュニケーションとしては不完全であるにもかかわらず、このような張り紙が多くの場合で見られるから。

問四 — 線(3)「^{アコモデーション}調 整」のメカニズム」とありますが、トイレの利用者に働く「^{アコモデーション}調 整」のメカニズム」とはどのようなものですか。五十一字以上六十字以内で具体的に説明しなさい。

問五 — 線(4)「この分析は、ソルニットの例には適切でも、美術館の例をうまく扱えない」とありますが、「この分析」が「美術館の例をうまく扱えない」と筆者が判断したのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア マンスプレイニングは男性が女性との会話の主導権を握ろうとする際に起きるといふ分析は、絵画の批評を聞かされるだけの美術館の女性の例にはあてはまらないから。

イ マンスプレイニングは男性が女性の意見を質問だと思い込むことで起きるといふ分析は、言葉を発していないのに男性から絵画の解説を受けた美術館の女性の例にはあてはまらないから。

ウ マンスプレイニングは女性から質問を受けた男性が喋りすぎてしまうことによつて起きるといふ分析は、絵画について質問する前に男性に話しかけられた美術館の女性の例にはあてはまらないから。

エ マンスプレイニングは女性には無知でいてほしいと男性に思わせる社会的な条件が背景となつて起きるといふ分析は、女性が絵画に詳しくないことを見逃さず説教をした美術館の男性の例にはそぐわないから。

オ マンスプレイニングは女性に学問は必要ないと人々に思わせる社会的な条件が背景となつて起きるといふ分析は、女性に絵画の意義を行った美術館の男性の例にはそぐわないから。

問六 — 線(5)「^{アコモデーション}言語行為の 調 整」といふ観点を取るとき、マンスプレイニングの害もよりわかりやすくなるだろう」とありますが、「マンスプレイニングの害」とはどのようなものですか。「^{アコモデーション}調 整」のはたらきを踏まえて六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問七 本文の内容についての説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「きれいに利用いただきありがとうございます」というトイレの張り紙は、はつきりと命令や依頼の言葉を使っているわけではないのにもかかわらず、張り紙を見たトイレの利用者に適切な利用を促す効果がある。

イ 一九世紀末から一九二〇年代、この哲学者たちは世界を正確に表現できるかどうかという観点から言葉のはたらきを捉えていたが、オーステインはそのようなはたらきは言葉の一面面ではなく、言葉はもつと多様な行為に関わるものであると主張した。

ウ 哲学者のデイヴィッド・ルイスが「調整」^{アコモデーション}と名付けた事柄^{ことば}は、相手が発言をした際にその発言が適切になるための前提条件が満たされているかが不確定でも、満たされているのだらうと聞き手が推測すること、発言の適切さを疑わずに済ますという現象のことである。

エ マンスプレイニングは「説明」の一種だが、「説明」は相手から質問された場合に行うものであり、質問されていない状況で行われた「説明」は言語行為としては正しくないため、マンスプレイニングは言語行為とは言えない。

オ 言語行為における「調整」^{アコモデーション}は日常の様々な場面で見られるが、それは時にはマンスプレイニングのように相手をコントロールするものとして機能する危険性をはらんでいる。

(問題は以上です)



令和六年度

国語解答用紙

渋谷教育学園渋谷中学校

※らんには記入しないこと

受 験 番 号	
氏 名	

合計得点	※
------	---

↓ここにシールを貼ってください↓

一
問一
①
②
③
④
らか

問二	
問三	
問四	
問五	

[illegible]

問七
問八
問九

二
問一
①
②
③
④

問二	
問三	

[illegible]

問五

[illegible]

問七	
----	--

✕

5

303

✱



8

5

✖